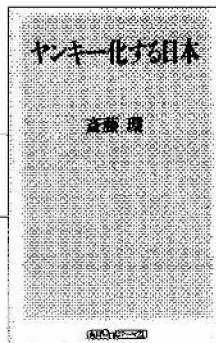


ヤンキーは、今や、学校を荒らす不良ではない。青年期精神病理学専門の齋藤氏は、今のヤンキーについて、「高尚な芸術」に対するパッドセンス、「気合い」や「絆」といった理念のもと、家族や仲間を大切にすると、倫理観が融合した普遍的な文化であると述べる。「コミュニケーション」も、お笑い芸人のように達者で、なぜか自信をもっている。

対談のなかで、氏は、各地の学校で行われているよさこいソーランなどのヤンキー性を指摘し、また、スバルタ教育、金八先生やヤンキー先生、「GTO」や「C」くせん」などのメディアによる反知性主義の流れを指摘する。「理屈をこねていてもしょうがない」「とにかく真心と誠実さで当たっていけば人は変わる」、そして「理論は熱の前に敗れる」という前提があるというのだ。

それでも、氏は、非行はともかくヤンキー性は更生させる必



齋藤環 著

864円 角川Oneテーマ21

☎03-3238-8521

ヤンキー化する日本

要はないというヤンキーを突き詰めていくと、絆や協調性に傾き、まとまりをつくるのに役立つという。たしかに、現実社会を主観的にうまく生きるには良い方法かもしれない。しかし、氏は、同時に、公共概念とセツ

トで「個人主義」を再インストールする必要がある。ヒップホップの裏には黒人の歴史があり、よさこいの裏にはまちづくりがある。また、ヤンキーになれない

一部の生徒とも共生させなければいけない。精神医療としてはともかく、教育においては、公共を担う者の育成のために、これらの「科学的な見方・考え方」や他との対話の方法論を彼らに教える役割がある。そのことによって、彼らは、より根拠ある自信を持つことができるといえよう。

(聖徳大学教授・西村美東士)

